
不思議の国のはじめ君 (SSLアリスパロ)

彩月絢芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議の国のはじめ君（SSLアリスパロ）

【Nコード】

N1324Y

【作者名】

彩月絢芽

【あらすじ】

ご存知『不思議の国のアリス』を薄桜鬼で。たぶんこの話を語っているのは沖田さんです。斎藤さんがヒロインです。いろいろな人に言い寄られる・・・かもしれません。

いろんなもののイメージが壊れると思うので、

『アリス』や『薄桜鬼』の原作が好きな方はご注意ください！

後半の方はかなり『鏡の国』に乗っかって書いてしまっています・・・

•
o

プロローグ

「総司そうじ！ おい、総司どこにいるんだ」

「ここは薄桜学園はくおう。」

風紀委員長・斎藤一はじめは、昼休みを利用して問題児・沖田総司を探していた。

今日という今日は、総司に放課後残って反省文を書かせる話をつけようと土方先生ひじかたと決定している。

だが、今朝もまた遅刻してからは全く校内で姿を見かけない。脱走したかと思っただが、まだ鞆が教室に残されている。

そこで思いついたのは、学園の裏の林だった。

一応、学園の敷地内にそれはあり、元々は大学を建設するための用地だと聞いている。

しかし昨今の大学統廃合などなかなか大学新設が軌道に乗ることは難しく、工事が手つかずになっているのだと情報通の山崎君やまざきに聞いたことがある。余りに広大なため、一般の生徒たちには立ち入り禁止区域となっている。

だがやはりあそこなら、一目につかずサボれるというものだ。

林に入って行くと、昼間でも薄暗くなっていく。奥に行っているのだろうか。

ガサガサ、と茂みから何か飛び出して来た。

「うわっ?!」

「大変です。これでは遅刻してしまう」

白衣のポケットから懐中時計を取り出したのは、校医の山南先生さんなんだった。

しかし、何故こんなところにいるのか。そして、それよりも一
目を引いたのは……。

「山南先生、何なのですか、そのウサギの耳は……」

なんと、山南の頭には、白いウサギの耳が生えていたのだ。
それだけではない。山南の髪も白く、瞳が赤く光っている。

「ククク……参りましたね。どう言い訳をしたものか……沖田
くんもまだ見つからないし」

「えっ、総司が……?」

山南には、一の声が聴こえていなかったらしい。慌てて林の奥に
駆け込んで、いや跳ねるように行ってしまった。

「あつ、山南先生、待ってくれ！ 総司を探すなら俺も一緒に！」

山南を追って一も林の奥に急いだ。

ところが。

木の根につまづいて倒れた一の目に、飛び込んで来たのは口を開けた暗闇。

巨大な穴に―は飲み込まれてしまった―！。

（続く？）

プロローグ（後書き）

アリスを一さんでやってみたら・・・？という妄想より生まれました。

薄桜鬼でアリスは皆さんいろいろと創作されている方がいらっしやるので

配役かぶったらすみません。

とりあえず

アリス・・・斎藤一

白ウサギ・・・山南敬助（羅刹W）

と、あとハートの女王とチェシヤ猫とお茶会のメンバーだけ決まっています。

話が脱線したり、『鏡の国』の話がまざったりしていきそうなのですが、

思いついたら書いていこうと思います。

1 羅刹の穴へ落ちて

それはとても深い穴だった。

一は咄嗟に木の根につかまろうとしたが、その根もどんと下に剥がれ落ちて行く。

「一体どこまで伸びてるんだ？」

地学の授業で、地球の中心核は灼熱のマグマだと聞いた。

もしかするともしかしてだが、そこまで行き着いてしまうのではないだろうか？

だとしたら、一瞬で一の命は終わってしまうに違いない。

しかし、それにしてもどんと落ちて行くがいつこつに息苦しくもなく、むしろ宙を浮かんでいるような不思議な気分になる。

そして、下のずっと先からは光が漏れている。

「死ぬ時には人生が走馬灯のように巡るといいますが、そんなこともないしな……」

むしろ、なんだか時間を遡っているような気さえする。

すると手に何か当たる物を感じて、一はそれをつかんだ。先ほど山南先生が手にしていた懐中時計だ。

「……………」

時計はものすごい勢いで逆回転していた。

「なんだこれは……」

光がだんだん強くなってきて、眩しさに一は思わず目を瞑った。

すると、急に水の中に入ってしまったようだ。一は必死で水面に泳ぎ上がった。

頭を出すと、そこは見知らぬ海岸だった。

1 羅刹の穴へ落ちて（後書き）

あー、ドードーを誰にするとか考えてなかったや・・・。
源さんのSSLでの設定を知らなかったのですが、一応公式通りに
直しておきました><

2 誰かの涙のプールと長い話

なんとか岸まで泳ぎ着いた。

おそらく山南もこの岸に着いたと考えるのが自然だが、それらしき足跡も見当たらない。

「見失ったか……」

濡れた重い服にのしかかれるように、一は途方に暮れた。
すると突然、

「ハジメ君じゃん、どうしたのこんなところで？」

振り返るとそこに居たのは、一年後輩の幼馴染、とつとつへいすけ藤堂平助だった。

「平助……お前もあの穴に落ちたのか？」

しかし……どうも様子が変わる。制服ではなく、鮮やかな青のギザギザ模様のついた羽織を着ている。

(これは……何時か何処かで見ることがあるような……)

だが一にそれを思い出すことはできなかった。
平助の姿が異様だったのはそれだけではない。背中と頭のとっぺんに羽根まで生えているのだ。

「穴？違うよ、その池にはまっちまったの」

平助が指差した海だと思っていたものは、いつの間にか池に変わっていた。しかもすぐ側に広大な屋敷がある。そして塀に囲まれた屋敷からは剣道のようなかけ声が聴こえてくる。

「ここは・・・何処だ？」

「やだなーハジメ君、俺たちの屯所に決まってるじゃん。この羽織濡らした事、女王様に知られたらただじゃ済まないから、ちよつとシマバラの森に行って乾かそうぜ。サノさんやシンパっつあんもそこで茶会やるって言ってたし」

「屯所？ 女王様？ 茶会？」

ここで、一はようやく自分が夢を見ているのだと思いついた。そうでなければ、よく知っている者が知らない格好をしているわけがないのだ。

「早く、ぼやぼやしてないで。見つかるとマズいよ」

平助に引っ張られるようにして一は塀の外へ出た。

「平助、どうやら俺は記憶を無くしてるようだ」

「あー、そうなの？ でも俺の名前覚えてるじゃん」

「・・・名前と顔ぐらいしか思い出せんのだ。藤堂平助、だろう」

「うーん、ちょっと違うな。ヘースケ・トードーだよ」

「余り変わり映えしないような気もするが」

「そっかな？ 俺たちはシンセングミって国の兵士だよ。それで、俺もハジメくんもその騎士^{ナイト}なんだ。といってもハジメくんは銀のナイトで、オレはまだ馬のナイトだけだ」

平助、いやヘースケは疑いもせずかなり丁寧に説明してくれる。
この単純さが救いだっただ。

「他に何か思い出せることってないの？」

「そうだな・・・そういえば、俺は確か総司を探してたはずだ」

げっ、とヘースケが呟く。

「ソージってあの厄介な猫のソージだろ？ 今そのことで女王ムツ
チャクチャ怒ってるもんなあ」

「総司は何をしでかしたのだった？」

「女王様の句集を盗んだ罪がかかっているんだよ。それでハジメくん
と同じ銀のナイトの称号も剥奪されて。今サンナーンさんが指名手
配してる」

「何だつて?! クシュウ、とは何だ」

「詳しくはサノさんたちに訊いてよ。あつ、着いたぜ」

ヘースケが導いてくれたのは、先ほどまで一が歩き回っていた学
園の林のようなどころだった。

中へ入って行くと、急に目の前が開けて、豪華な朱塗りの門が現
れた。門をくぐれば、瓦屋根葺きの家々に挟まれた通りの真ん中に、
赤い毛氈が敷かれ、席に着いていた人物を見て一は息を飲んだ。

2 誰かの涙のプールと長い話（後書き）

――――

発想が貧困ですみません……。

3 シマバラのへお茶会

座っていたのは、まるで近世の花魁と思しき美しい女性。その傍にはヘースケと同じような羽織に身を包んだ薄桜学園の教師である原田左之助さのすけと永倉新八しんぱちがいた。そしてそこに設えてあったのは、茶会というよりどう見ても宴会の席。

（もしかして、俺は江戸時代にも迷い込んでしまったのか・・・？）

だが・・・、原田は頭の上にシルクハット、永倉にはうさぎの耳が生えている・・・。一は頭痛がし始めていた。

「おー、遅かったじゃねえかヘースケ。お、ハジメも連れて来たのか」

「おまえがこんなところに来るなんて珍しいな、ハジメ。女王様に告げ口するなよ？」

「わりーわりー、ちょっと池にハマっちまってさ。それより大変なんだ、ハジメくんが記憶喪失になっちゃって」

「な、なんだって?!」

「どういうことだ、ま、とりあえずこっち来て座れよ」

永倉は怪訝な顔をし、原田が手招きをした。

「どーした、ハジメくん？」

原田たちの所へ行こうとしたヘースケが突っ立ったままのーに声をかけた。

「ははは、キミギク公爵夫人の美しさに見とれてたんだろ」

永倉が豪快に笑った。

「いやですわ、シンパチウサギさん。おからかいになつては」

公爵夫人と呼ばれた花魁のような女性が婉然と微笑む。どうやらそれがこの世界での彼の呼び名らしい。

「まあ、ヘースケも、ハジメも、飲め飲め」

原田、いや確かサノと呼ばれたシルクハットの男が杯を勧めてくる。

「は、原田先生、俺はまだ未成年です！」

ーは驚いて断った。

「またまた〜ハジメくん、何言ってるの。シンセングミでー二を争う酒豪が〜」

ヘースケは困ったように笑っていた。

(お、俺はこの世界ではもう大人なのか・・・?)

「《茶会》ってことにしないと昼間っから飲めないしな」

サノが肩を竦めて見せた。

「まーこういうカンジなんで、説明してやってよ、サノさん、シンパチさん」

そういえばさつきからヘースケは2人に対して敬語を使っていない。ここはやはり夢なのだな・・・。

(夢ということならば、酒を飲んでも問題はない・・・のだろうか) 少し悶々としている一を見て、キミギクが手を叩いた。

「お茶とお菓子を持って来ておくれ」

ほどなくして黄色い着物姿の少女が向かいの家から出て来た。何処かで見ることがある。

近所の島原女子校の、ひめのせん姫野千とかいう名前だったはずだ。お嬢様で薄桜学園内でもファンがいるなど有名なのだ。

「もう、人使いが荒いんだから」とぼそぼそ云いながら千はお盆を運んで来た。

「これなら良うございましょう?」

微笑む公爵夫人に一はお礼を言った。

「ヘースケも本来なら未成年だ。おまえも茶にしる」

「ええ、冗談キツイぜハジメくん。オレはこの一杯のために屯所

勤めしてるようなもんなのに」

千の点ててくれた抹茶を口にすると、こっくりとした甘みと苦みがムースのように舌に流れ込んだ。

「美味しい・・・」

「え、ありがとう」

千は嬉しそうに頬を染めた。そういえば、あの姫野千も茶道部だったような気がする。

「で、記憶喪失ってのはどういうことなんだ？」

シンパチウサギが訊いてきた。

3 シマバラのへお茶会 (後書き)

お千ちゃんと君菊さんの立場が逆転・・・。

衣装的にこつちの方がいいのかなーと思ってしまつて。

平助をドードーにしたけど、お茶会のトリオは本当はそのままにしたかつたですね〜><

しかし、この世界での左之さんはちよつと意地悪です：可愛さ余つてなんとやら、なのかしらん。

4 サンナーン、ヤマザキを送り込む

「オレたちの名前と顔以外覚えてないらしいんだ。それと、ソージの指名手配の理由も覚えてないって」

ヘースケが簡単に説明してくれた。

「そりゃあ、ハジメはソージと仲良かったもんな、忘れたふりしてかばおうって肚はらじゃないのか？」

杯を手にしたサノが少し意地悪く言う。

「違う！ 俺は、土方先生に言われて総司を探しているんだ・・・」

一は反論した。

「うん、それは間違いないぜ。ソージはヒジカタ女王の句集を盗んだんだからな」

シンパチがそう言って、酒の肴をつまんだ。

「そのクシュウとは・・・土方先生が女王？」

「女王が屯所で開かれる今度の俳句大会に使うんだそうさ。たくさん俳句が載ってる」

そういえば土方先生も俳句が趣味だと聞いたことがあった。

屯所が先ほどの池のあった大きな屋敷のことで、そこに女王ヒジ

カタヤコンドー王、サノやヘースケもみんな住んでいるのだとシンパチは教えてくれた。

「まー、とりあえず女王に逆らうことさえしなきゃ、シンセングミでは問題ないはずだ。ハジメは特に、女王の信頼も厚かったしな」

「信頼、っていうより、ハジメは女王様の信奉者みたいなもんだろ」

サノが茶々を入れた。

「確かに、オレたちみたいに仕事さぼるなんてことは、記憶喪失でもなきゃしてないよな」

ヘースケが愉快そうに笑う。

そう言われて一は、やはり本来の仕事に戻るべきなのでは、という気持ちになってきた。

「ただ、気をつけないといけないのは、金のナイト、白ウサギのサンナーンさんだな・・・」

サノがそう呟くがはいか、朱塗りの門の向こうから人影がたち前に現れた。

「や、山崎・・・!!」

黒尽くめの忍装束を着た山崎が、大きな封筒を持って現れた。しかし、この山崎の格好は忍者っぽいだけではなく、大きなトカゲのしっぽをつけていた。

(山崎、薄桜学園きつての常識人であるお前もか……！)

「シンセングミ香かおりのナイト、ススムヤマザキです。公爵夫人へ女王陛下より、招待状を持って参りました」

「あら、ありがとうございます。早速出かける準備をしなくては。皆様、ご機嫌よろしゅう」

キミギクは手を叩いて立ち上がると、千に連れられて家の前に入ってしまった。

「ヤ、ヤマザキ君。勘違いしないでくれよ。これは《茶会》なのであって……」

「心得ております。女王は句集が戻って俳句大会の準備に余念がありません。報告すると余計な手間がかかってしまいます」

「ありがとうございます。流石、話がわかるぜ」

しどろもどろなシンパチたちに、ヤマザキはさらりと言った。

「句集が戻った、ってことはもうオレたちはソージを探さなくていいわけか？」

「それはまた別の話です。ただ、今は俳句大会のため、保留になっているだけかと。みなさんも早急に屯所にお戻りください」

「えー？オレなんかまださっき来たばかりかだって言うのに……」

ヘースケが不満を漏らす。しかし、一もそろそろ屯所に戻るべき

なのだろうと考えていた。

「ま、またそのうちやればいいんだよ《茶会》なんだから」

サノが飄々と言った。

「けど、ハジメ、隊服はどうすんだ？ お前、それも忘れたのか？」

シンパチが訊いてきた。どうやら隊服というのは、この揃いの羽織のことらしい。

「隊服無くしたってなると、また女王がオカシムリだぜ」

「だよなー。ヤマザキ君、余ってる隊服ない？」

「一体どうしたんですか」

そこで一はヤマザキに、記憶がないのだという説明をした。

「そうですね……。一応部屋にストックがあります。オレについて来てください」

そこで一は屯所に帰ると、ヘースケたちと別れてヤマザキについて行くことになった。

4 サンナーン、ヤマザキを送り込む (後書き)

タイトルが原作と順番変わってしまった・・・。

でも概ねキャラの配役が決まったので満足です。
勢いで今週中に終わったりしてw

5 伊東虫からの助言

屯所に帰ると、トカゲのヤマザキはしっぽをびよこびよこ揺らしながら勝手口らしいところに案内してくれる。

「ここからなら人目につかない。ひとまずオレの部屋へ行きましょう。オレは隊服の管理も任されていますから」

ヤマザキの部屋は、まるでクリーニング屋のようだった。

「この中から、ちょうど合う大きさのを選ぶので待っていてくださいね」

ヤマザキはサイズ順にかかっている羽織の列を見ていった。

「俺のサイズを知っているのか？」

「ええ。隊士のみなさんの寸法はみんなここに入っています」

ヤマザキは少し得意そうに、自分の頭を人差し指でトントンとたたきながら答えた。

「ハジメさんののは特に」

小声でそう付け足したが、後ろを向いていたので一には聴こえなかった。

「わかった……。だが、俺が着ると他の人たちの服が足りなくなってしまうのでは」

「戦で汚れたりするのは避けられないんで、たまに新調するんですよ。なので常に余分はあります」

「そうか・・・」

ヤマザキは羽織を手繰っていた手を停めた。

「あ、すみませんハジメさん。ハジメさんのサイズの羽織、ちょうど切らしています。ひとまずオレの羽織を着てください」

「いや、それは悪い。お前だって着ることがあるだろう」

「いえ、オレは内勤か諜報活動が主なので、滅多に着ることはないんです」

「そうか・・・すまない」

「お気になさらないください」

心なしがヤマザキの頬が赤いのは、気のせいだろうか・・・？

「それから、厨房で今人が足りないんです。俳句大会で大勢を呼ばなくてはいけないので。お手伝いいただけますか？」

「勿論だ。総司を探す必要がなくなったのだからな」

厨房に行くと、そこでは山のような材料を捌くために、右へ左への大騒動だった。

「すごい量だな」

「ええ、年に一度の俳句大会ですから」

厨房の隅の卓に、小さな小瓶が数個あった。一はそれを1つ手に取ってみた。ガラスの小瓶だ。中に、透明な赤い液体が入っている。

「これは、何かの調味料か？」

ヤマザキに訊いたが、彼もわからないようだ。

「いえ、どうでしょう。あ、手紙がついています」

見ると、小瓶の下に手紙が敷かれていた。達筆な字だ。

『厨房の皆さんでどうぞ、飲み候へ』

「お飲みなさいということか・・・」

古文担当が土方先生だったからか、読み方も意味もよく理解できた。一方、一が咳くとヤマザキは顔色を変えた。

「き、きっとサンナーンさんの差し入れですね。でも、ハジメさんは飲まなくても大丈夫だと思いますよ」

「何故だ」

「サンナーンさんの発明品だからです」

「発明品？しかし、飲んでいけないものならそう書いてあるだろう」

「……ともかく、それについてはもう触れないでください」

料理が得意な一が加わったことによって、厨房では見る間にたくさん料理が出来上がっていった。なんといつても一は学園で自他に認める弁当男子なのだ。

名残惜しそうなヤマザキと別れて、一は厨房を後にした。

床には既に空になった小瓶が落ちていた。隊士の何人かは既に口にしたものらしい。ヤマザキには止められたものの、一も気になって一瓶拝借してきてしまった。

「一体何なのだろうな……」

一は中庭に出て来た。

太陽に透かすと、ガラスの中の赤い液体はきらきらと光った。

「それは変若水よ^{おちみず}」

「……」

声がして振り向くと、廊下に寝そべって煙管を銜えた音楽の伊東^{いとう}先生だった……。芋虫のような体型になっていたが。

「おちみずとは、何ですか」

「人が鬼に、鬼が人になるの」

「はい？ 鬼ですか？」

「そうよ、危ないでしょう?」

「山南先生は、何故そんな物を作って、俺たちに飲ませよう?」

「さあねえ、どうしてかしら?」

伊東芋虫は煙草の煙をゆっくりと吐いてごろごろと転がる。

「もうすぐ、戦が始まるのかもね」

「戦?」

「あなた、質問ばかりなのね」

質問ばかりして機嫌を損ねてしまったのかと思い、一はその場を立ち去ることにした。

「失礼します」

「片方は人間の側、もう片方は鬼の側」

背中から伊東虫の聲がした。

「……何のことですか?」

「キノコよ」

伊東は一に向かって思い切り煙を吐き出した。咳き込みながら次を見ると、伊東は消えて後に残ったのはキノコだった。

5 伊東虫からの助言（後書き）

やっと飲み物登場。

薄桜鬼だからコレしかないだろうな、と。

（きつとみんな考えつきますよね）

あと、伊東さんもコレしかないな、とWWW

ちよこつと齋 山です。

6 ネコとキノコ

キノコを手にした一は、しばらく考え込んでいた。

(しかしこのキノコは円形だ。どちらがどちらの側など、見ただけでは到底わからない・・・)

しかも、人間になったり鬼になったりとはどういうことだろう。

どうなるかわからないキノコよりも、この小瓶に入った変若水の方が気になる。それは未だに蠱惑的な赤い光を放っていた。

ちようど喉も乾いている。一は思い切って小瓶の中の液体を一息に飲み干した。

「・・・・・・・・がはっ！」

途端に喉が焼けるように熱くなり、体中が軋むように痛み始めた。目の前も真っ白になっていく。

池を覗き込むと、映った自分の髪が白く、瞳が赤くなっているのがわかった。まるで、山南、いや、サンナンのように。

(やはり毒薬だったか・・・)

土方先生にもらった石田散薬を持ってくれば良かったと思いつながら、一の意識は次第に遠のいていった。

目が覚めると、一は布団に寝かされていた。覗き込んでいるのはよく知った顔。

「そう……じ……」

「ハジメくん、なんであんなもの飲んだのさ。心配したよー」

優しく微笑んだ総司、いやソージは、やはりあの羽織を着て、猫耳を生やしていた。

「持ってたキノコで解毒したから良かったものの、自殺行為だよ？
今度そんな勝手なことしたら、僕が許さない」

「俺は、お前を探して……」

まだ身体がだるいようだ。

「石田散薬を持っていれば大丈夫だと思ったのだが……」

「まだ騙されてるの、そんなわけないじゃない。キノコがないとダメなんだよ」

「そうだ、キノコ……」

「このこと？」

ソージはキノコを出して見せた。半分に割られて、片方の欠片はちぎり取った跡がある。こちらが人間に戻る側ということなのか。

「これは特殊なキノコなんだよ。今これを僕も探し回っているとこだったんだ。サンナンさんの計画をこれ以上進めないために」

「どづいうことだ？」

「君が飲んだ変若水、あれは人間を羅刹という鬼に変えてしまうんだけど、鬼で居続ければやがて人間は力を使い果たして死んでしまふ。サンナーンさんは、鬼との戦のためにシンセングミの中に羅刹を増やそうとしてるんだ」

「何だつて？」

「鬼っていうのは、キンキラ国に住んでる鬼のこと。カザマとかね。それで僕は、羅刹が増えるのを止める時間を稼いで、戦を少しでも遅らせようとヒジカタさんの句集を盗んだんだ。俳句大会が終わるまでは、少なくとも戦は始まらないから」

「そうか……。しかし、句集は見つかったと聞いているぞ」

「うん、今回は失敗したみたい。盗んだ句集は偽物だった」

残念そうに耳を伏せたソージは、一に一冊の帳面を見せた。中を開くと、そこにはびっしりと俳句が書き込まれている。

「これは本物ではないのか？」

「ヒジカタさんの俳句じゃないよ。僕はあの人の俳句ならもうしょっちゅう見てるからよく覚えてる。いつも何処に隠したって見つけるんだけど、サンナーンさんが入れ知恵したのかな。こうなったら、俳句大会当日に盗みに行くしかないね」

「俺にも、何か手伝えることは……」

「そうだね、サンナーンさんのところから変若水を全て奪ってくるか、

ヒジカタさんに会って俳句大会を少しでもうまく引き延ばすかー
ー相手はどっちにしても鬼だけど」

「土方先生まで羅刹に？」

「いや、そういう意味じゃなくて、あの人の二つ名が、泣く子も黙
る鬼の女王だから。二言目には『腹を切れ』だよ？」

ソージはしっぱを振って悪戯っぽく笑った。

「もうそろそろ俳句大会が始まる頃だ。僕が行けばきつとすぐに
腹を切らされちゃうだろうし、ハジメ君はヒジカタさんのところに行
つてくれないかな」

「わかった」

ーはソージの部屋を出て、俳句大会の開かれる梅園へと向かうこ
とにした。勿論キノコも持って。

(これも何かの役に立つことがあるかもしれない)

なにせ鬼と戦になるかもしれないのだからな、と知らず知らず
はこの世界に馴染みつつあった。

6 ネコとキノコ (後書き)

やっと猫耳総司登場。

キノコである必要性はもはやなかったわけなんですけど、石田散葉が効くという方向には持って行きたくなかったw

7 女王様の俳句大会

一が梅園の入り口に行くと、梅の木の周りを隊士らしい男たち3人が化粧箱を持って囲んでいた。よく見ると、赤い梅の花に白粉をまぶしているようだ。

「おい、おまえたち……？ 何故梅に化粧など……」

一が声をかけると三人は揃ってぎくりとした。

恐る恐る振り向いた1人が、一だとわかってほっとしたように小声で返事をした。

「サイトーさん、このことは是非ご内密に。実はこの梅、本当は白梅じゃないといけなかったのですが、間違えて紅梅が咲いちゃったんで、慌てて女王様が来る前に塗り直してるんです」

「梅が間違えるわけではない。植えた者が間違えたんだろう」

「そうそう、植えたやつが間違えたんですが、」

ともう1人が口を挟んだ。

「女王に見つかったら俺たち歩隊士^{ポーン}全体の責任になるから、急いで先回りしてこっそりやってるわけなんですよ」

「そうか……」

「サイトーさんも良かったら手伝ってくれませんか？ まだあとあつちの方にも咲いてるらしいんです」

残った1人がすまなそうに訊いてくる。ヒジカタ女王が来るまでなら、と一は請けあつた。

しかし、間もなく呼子のような音が聞こえた。

「ヒジカタ女王だ！」

隊士たちは慌てて梅園の奥に駆け込んだ。一も一緒に逃げようとしたが、つまづいて倒れてしまった。

起き上がった時には既に大勢の足音が近づいていた。

（考えれば、俺はとにかく女王に会って俳句大会を引き延ばさなければいけない。・・・ここは逃げるところではないな）

そう思つて一は動かずにいた。

「誠」と書かれた旗を持った隊士たち、続いてヤマザキと用務員の島田さんに似た両手がロボスターのはさみになっている男と学食の井上さんに似た甲羅を背負った男、ヘースケ、サノ、シンパチが現れた。それから王冠を乗せたクツシヨンを手にしたサンナーンや伊東芋虫も居た。

行列の最後に現れたのは長い黒髪を縦ロールでポニーテールに結つたヒジカタ女王と、薄桜学園の理事長近藤勇、ではなくおそらくコンドー王だった。

行列が一の前までやってくると、みんな止まって一を眺めた。かなり驚いたり、心配したりしている。

「サイトーさん、やばいよ」

「切腹かな」

そこで一は、さっきヤマザキに借りたはずの隊服を結局着ていないことを思い出した。

「おい、サイトー！」

ついに女王ヒジカタが口を開いた。

「隊士の命より大事な隊服をどうした？」

「そ、それは……」

「女王様！ サイトーさんの隊服は俺の部屋に忘れてあります！」

ヤマザキが必死でフォローしてくれた。

「ヤマザキには訊いてねえ！ おい、それで今ここでおめえは何をしてたんだ？ 答える」

「お、おそれながら申し上げます。俺たちはここで梅に化粧をしていました」

「化粧だあ？ 一体全体どういうこった」

「そ、その、白く塗ってたんです」

行列に衝撃が走った。

見る間に女王ヒジカタの額に青筋が走り、雷のような怒号が飛んだ。

「てめえ、切腹だ、腹を切れ！」

「し、しかし、なぜ花を塗ったら切腹なのですか」

「るせえ、俺は白梅が好きなんだ。なのに紅梅を植えやがった。植えたやつも切腹だ」

何処からか先ほどの平隊士3人が連れて来られ、悲鳴を上げながらまた何処かに連れて行かれた。

「サイトー、おめえも共犯なら容赦はしねえ。年に一度の俳句大会に、隊服まで忘れやがって」

「ま、待てよトシ。今日は穩便に行こうじゃないか。ソージの次にハジメまでいなくなつては、銀のナイトが空になってしまう」

コンドー王が諫めに入った。

「そんなのは他から繰り上げればいいことよ。現にうちは幹部が余つてるんだしな。くそ、この梅も斬つてくれる」

すらり、ヒジカタは自分の刀を抜いた。

「お、恐れながら、梅には罪はないと思います。赤でも白でも、梅は梅です」

必死になつて一は答えた。すると、

「ん？・・・そうか。おまえの言つことはもつともだ、サイトー」

驚いたことに、あんなに怒り狂っていた女王が刀を鞘に納めた。

「俳句大会を決行する。サイトー、お前も俳句は読めるな？」

面食らった一に、コンドローが慌てて

「も、勿論読めるな！」

と言うので周りを振り向くと、ヘースケやヤマザキがとにかく肯定するように促している。

「は、はい・・・」

「よし。では来い」

一は行列に加わって梅園に向かうことになった・・・。

7 女王様の俳句大会 (後書き)

ああ、土方さんがただのキレやすい女王になってしまっている(涙
キャラ崩壊ごめんなさいごめんなさい！

あと、本当は土方さんは紅梅の方が好みだった、という説を聞いた
ような気がします。

梅は小さいから、口紅をいちいち塗っていたら大変かなと思って。

8 井上ガメの話

「いいお天気だね、サイトー君」

隣を歩いてきた井上ウミガメが声をかけてきた。

「え、ええ……。この俳句大会、一体何をすればいいんですか？
実は俺、現在記憶を無くしてまして」

「そうなのかい？ 俳句大会といっても、自分で俳句を詠むわけじゃないのさ。公爵夫人が読み上げる女王様の俳句をみんなで聞いて誉める。ただそれだけのことさ。誉め方が一番良かったものが優勝する」

それは俳句大会というのだろうか……。しかし、この世界でなら、もういちいち驚いていられない気がする。

「そういえば、キミギク公爵夫人が見当たらないようですが、どちらに……」

「しいっ！」

井上ガメは人差し指を口の前に立てた「ー」ようだったが実際はウミガメの手だった。

「実は公爵夫人は切腹を言い渡されたんだよ。立場も弁え^{わきまえ}ず、俳句大会の中止を訴えてね」

「何故……？ しかも切腹を女子に申し渡すなど、ありえないで

しょう」

「いや、もうそれは女王の趣味・・・というか気まぐれだからね。公爵夫人は元々鬼の側で、こちらに協力するようになった捕虜だったんだ。しかし、鬼がいつ攻めてくるかもわからないのに、俳句大会を開催するべきではないと公爵夫人は強硬に・・・」

「俳句大会を始める！ 者ども、席に着け！」

ヒジカタ女王の怒鳴り声が響き、梅園の真ん中に毛氈が敷かれ、一たちは座ることになった。

「サイトーくん、君、公爵夫人の代わりに俳句を読み上げる係をやってくれませんか」

涼しい顔で頼んできたのはサンナンだ。眼鏡の奥で赤い眼がきらりと光り、一は寒気がした。

「え、お、俺は・・・」

「記憶が無いんでしょう？ ボ口を出さないためには、いい手だと思いますよ」

井上ガメとの会話を聞いていたのだらうか。

一は渋谷女王のそばに行き、『ほうぎょくほくしゅう豊玉発句集』と書かれた一冊の帳面が置かれた卓の前に座った。

（これが総司が盗もうとして失敗した句集か・・・）

「サイトー、ちょっと句集を貸せ。さっき思いついた句があるんだ」

ヒジカタ女王は一から句集を渡されると、筆を執ってさらさらと何やら書き込んだ。

「これをまず最初に出す。読んでくれ」

「は……。何々？」

一は書かれた句に目を通した。

『梅の花 赤でも白でも 梅は梅』

(これは、さっき俺が言った……。！)

呆れたのと、ヒジカタの句の出来映えに思わず一は笑いを漏らしてしまった。

「サイトー、てめえ今、笑ったな?!」

はっとすると、ヒジカタが鬼のような形相でこちらを睨んでいる。

「いえ……。まさか俺の言ったことを俳句にされるとは思ってもいなかったのだ」

「おめえの言ったことじゃねえ! これは、俺が思いついたことだ」

ヒジカタ女王はぶるぶると震えている。

「今日のおめえは本当になってない。法度はつとに準じて、腹を切りやがれ!」

「まーまー、さっきから聞いてれば、全く自分勝手なんだから」

突然、醒めたような声が、空の上から降ってきた。

8 井上ガメの話 (後書き)

ここでまさかの源さんの出番。

最初は一にも俳句を詠ませようかなと思ったのですが、
考えるのがめんどくさくてやめました(爆)

そして訊かれたことにいちいち真面目に答えてしまるのが斎藤クオ
リティ……。

9 句集を盗んだのは誰？

一同が見上げると、梅の木に登っていたのは猫のソージだった。

「相手がヒジカタさんだからって、みんなもよくつきあうよね、この非常時に」

「ソージ?! てめえ、よくもノコノコと顔出しやがったな」

ヒジカタが、引きつり笑いを浮かべる。

「ノコノコと顔出してるのはヒジカタさんの方ですよ。なんだって公爵夫人までつかまえたんです? 彼女は味方の鬼を裏切ってまで、こっちに協力してくれてる。その彼女が鬼の攻めてくることを予想してるのに、のんびり俳句大会なんてしてる場合ですか?」

「なんだと、テメエ、言わせておけば……。これまでの罪、全部並べて詮議してやる、そこへ直れっ!」

「ソージ、心配するな。鬼の方の対策はサンナーンさんに任せてあるんだ。なあ?」

「そうですねよコンドーさん、私の作った発明品のおかげで、鬼がたとえ今攻めてきたとしても歩の隊士たちは必死で戦ってくれますよ」

「発明品で、このことですか? サンナーンさん」

ソージは懐から大きめのフラスコを取り出した。赤い液体が陽を受けて輝く。

「?!」

「サンナーンさんに任せておいた結果がこれですよ」

ソージが口笛を吹くと、キミギク公爵夫人と千が現れた。羅刹となった隊士たちを縛って連れている。

「こ、こいつらは・・・?」

「この液体、変若水を飲んで羅刹にされてしまった可哀想な子たち。命を削って、戦うことしかできない鬼にされてしまったんです」

ぎよつとするコンドーに、ソージが説明する。

「あ、あと、公爵夫人には、牢から出てもらいました。とりあえず切腹はナシだね」

「サンナーンくん、これは一体どういうことかね?」

問いつめるコンドーに、答えたのはキミギクだった。

「確かに私は鬼の身内を裏切った身。しかし、このシンセングミにも裏切り者がいます!」

一同はざわめいた。

「何をおっしゃるのです、キミギク公爵夫人。私は確かに羅刹を作ること、兵の増強をしようとしたが・・・」

「ええ、でもそれは元々は誰の案だったのですか？ 入ってきて日の浅い、この男でしょう！」

キミギクが指差したのは、今まであんまり存在感のなかった伊東虫だった。

（ま、まだ残っていたのか・・・）

「ふ、ふっふっふ」

伊東はふてぶてしくも笑い出した。

「そうよ、この変若水をシンセングミに持ち込んだのはこの私。内部からの崩壊を狙ってね。鬼との戦は、もう始まっているのよ！」

そう言い放つと、伊東虫は隊服を脱ぎ翻した。

その途端、伊東の姿は大きな蛾になり、空へ飛んで行ってしまった。

「なんてことだ・・・羅刹計画が、鬼から仕組まれたものだったなんて。この上は、私が腹をつ・・・」

がつくりと肩を落とし絶望するサンナーン。木から降りてきたソージがその肩を優しく叩く。

「大丈夫です、サンナーンさんもこのキノコを食べてください。それで解毒されるはずですから」

その時、遠くから法螺貝のような音が聞こえた。

「鬼が、キンキーラ国が攻めて来ました！」

「見張りに出ている隊士が駆け込んできた。」

「よし、じゃあ羅刹問題も片付いたところで、こちらにも撃って出るか！」

コンドーの鶴の一声で一同は屯所に戻り始める。一は、手にしたままだった句集を・・・そっと、懐に入れた。

9 句集を盗んだのは誰？（後書き）

なんかやたらソージがかっこいいのは総司が創った話だからです。サンナーンさんを最後まで悪役にするかどうか悩みましたが、本編での扱いが結構酷いので救済措置。

伊東さん便利キャラ・・・。

10 騎士たちのカドリーユ (前書き)

今回はB.Lっぽくなりました。

10 騎士たちのカドリーユ

シンセングミの兵士たちは、合戦の支度を始めたようだ。各々が鉢金を締め、隊服の下に甲冑を纏っている。

「サイトー！」

呼ばれて振り返ると、いつの間にか着替えて馬に乗ったヒジカタ女王だった。

「今日の失態、挽回してみせろ。もし敵の大將、カザマを落とすに行けたら、お前を女王にしてみてもいい。ヤツは8マス目にいるはずだ」

「し、しかし、俺は男で……」

「四の五の言つな。武士に二言はねえんだ」

凜として戦装束に身を包んだヒジカタは、敬愛するあの土方先生を思い出させた。

「わ、わかりました……」

嘶く馬に乗って次に現れたのは、槍を携え帽子を^{シルクハット}あみだに被ったサノだ。

「おー、やっぱりサノさん、かつけー！ さすが角の騎士！」

軽々と馬から降りたサノに、瞳をキラキラさせながらヘースケが憧憬のまなざしを送る。

「サノ、先発隊は任せたぞ」

「女王陛下の仰せのままに、この角に賭けてましても」

サノは帽子を取って恭しく跪いた。すると頭には立派な一角獣ユニコーンの角が生えていた。

ヒジカタが行ってしまつと、サノは一に声をかけてきた。

「おい、ハジメ、どうせ今は馬に乗れないんだろ。俺の後ろに乗せてやるよ」

「い、いいのか？」

「その代わりに、勝つたら後でいいことさせろよ？」

「いいこととは・・・何だ？」

「そりゃあご褒美に決まってるんだろ。俺とお前は恋人同士なんだから」

「誰と誰が恋人同士だつて？」

一とサノの間に割って入ったのは、同じように戦装束に身を包んだソージだった。

「一くんに捏造した記憶を勝手に吹きこまないでくれるかな、サノさん」

「ね、捏造?!」

「ソージ、人聞きの悪いこと云うなよ。冗談だ、冗談」

サノはからからと笑いながら馬の方へ戻って行った。

「全く、油断も隙もないっいたら・・・」

「ソージ、サノさんの云ったことは冗談なんだな」

ここでの自分は一体どういう人間なのか、不安になって一はソージに尋ねた。

「当たり前じゃない。僕がいるのに」

「?!」

ソージは一を抱きしめてきた。

「お、おいソージ、これから戦だろう。こんなことをしている場合ではない。それにお前は手配されているのでは・・・」

「句集を盗んだ意図を酌んで、コンドーさんがナイトに戻してくれたんだよ。だから、僕と一緒に戦おうねハジメくん」

「わかった、わかったからその手を離せ」

その時、見計らったかのような法螺貝の音に合わせ、シンセング

ミの兵士たちは編隊を始めた。

先頭はサノ、シンパチ、サンナーン、そしてヒジカタだ。四人の乗った馬が正方形の隊列を作る。

(カドリーユか・・・)

確かに、それはまるで、西洋の古い軍事パレードのようだった。

その後、騎兵隊に続いて兵列は丘の上まで進んだ。

谷を見渡すと、広がっている平野。まるで、碁盤の目のように規則正しく水路が流れている。

「碁盤の目・・・というよりこれは、将棋だな。人間将棋というわけか」

ーは柄にもなくワクワクしてきた。

「ハジメさんの武具をお持ちしました」

ヤマザキが呼ぶ。野営地のテントに連れて行かれ、羽織とともに渡されたのはー竹光ではなく、本物の刀だった。

「ちょ、ちょっと待て。これは将棋ではなかったのか？」

青くなったーは傍らのソージに訊く。剣道二段の腕前だが、実際に人を斬るなど、したこともないしこれからもするつもりもない。

「ハジメくん、何言ってるの。戦なんだから、出会ったら斬り合いだよ」

「俺には・・・できない」

「しょうがないなあ・・・それじゃ、やっぱり僕と一緒に行かなくちゃね」

ソージはにやっと笑うと、一の手を握って走り出した。まっすぐに、谷底の将棋盤へ。

ソージがすごい勢いだっただので、一はついていくのがやっとだった。不思議だったのは、どんなに速く走っても、周りの景色が何も変わらなかったことだった。

(他の物まで、俺たちと一緒に動いてるのか?)

と一は息を切らしながらだんだん混乱してきた。

「ソージ、これは一体どういうことだ?」

「普通のことだよ。このマスではね、同じ場所に居続けるためには、もう必死で走らなきゃいけないんだよ。そして他の場所に移動するつもりなら、その倍の速さで走らないと!」

「?」

一は振り返って、そして気づいた。

「ソージ落ち着け、これは動く歩道と言って・・・」

これに乗って行けば走らずとも着くはずなのだ、と続けようとし

だが、歩道は一たちの進行方向とは反対に動いていた、つまり2人は逆走していたのだ。

ソージが突然、

「跳んで！」

と叫び、二人は三段跳びのように地面に着陸した。と思ったが、「あっ」という声が出たかと思うと、ソージは急激に遠ざかり見えなくなってしまった。着地に失敗してしまったようだった。一はぽつーんとそれを見送った。辺りには一の切らした息の音しか聞こえなくなってしまった。

「・・・・・・・・」

(とりあえず8マス目に行かなければならないのだな・・・)

10 騎士たちのカドリーユ（後書き）

えー、ここから鏡の国ストーリーになります。

『雪華録』を観たせいで、左之さんフィーチャーになってしまいました（爆）

CERO：Cな大人の時間です。

ユニコーンといえば、男性（）の象徴という意味でもあるらしく、この辺のチヨイスは絶対間違ってたかと思う。

カドリーユ（カドリール）は起源を調べて、

絵になりそうだったのでこちらに決めました。

土方さんの見せ場も作りたかったし。

追記。

原作にもある「居続けるには走らないといけない、進むには倍走らない」との正体は、

地下鉄モンパルナス駅の動く歩道（一時世界一速いと言われていた）に乗っていて思いつきました。

11 不思議の国の虫たち（前書き）

前回後半部分かなり加筆修正しましたので、
ここから読まれる前にお手数ですが読み直してください。

今回はノーマルCPっぽい・・・？
千鶴登場です。

11 不思議の国の虫たち

一は歩き始めた。すると辺りは森になった。寄って来たのは伊東芋虫、ではなく伊東蛾だった。一が刀の柄つかに手を掛けると、伊東は笑った。

「やめときなさい。私だって丸腰ですよ」

「・・・・・・・・」

一が刀を戻すと、伊東は突然云った。

「あなた、名前をなくしたりしたくないわよね」

「は？まさかそんなことは」

一は少し不安になった。でも、伊東は気軽な調子で続けた。

「だけど、名無しで家に戻れたらすごく便利だと思わない？ たとえば先生が授業で貴方呼びたくても、『始めますよ、』と言って止めるしかなくて、だって呼べる名前もないし、そうしたらもちろん貴方も授業を受けなくてすむわけでしょ」

「土方先生はそんなことでは絶対に、授業をやめたりはしない。俺の名前が思い出せなければ、『おいお前』と呼ぶだけだ。つまりらんことを云うな」

すると伊東蛾は、不機嫌になって行ってしまった。

「名無しの森で迷子になったら、キノコを忘れないことね。そして自分が誰だか忘れないように！」という捨て台詞を残して。

そのまま歩いて行くと、一は開けた野原に出た。その向こう側に森が見える。

（これが、名無しの森か）

一はこの世界に来た時を思い出した。あの時も、学園の裏のこんなところに入っていたのだ。元の世界につながっているのらないのだが……。

（しかし絶対に戻れる保証がないというなら……やはりこの戦^{ゲーム}にまずは勝つ他はない。そして8マス目^{ゲーム}には、森を抜けるのが唯一の方法のようだ）

一が内心でぶつぶつ言っているうちに、いつの間にか森にやってきてしまった。

（入ったら、俺の名前はどうなるのだ。別の名前にでもなってしまうのか？ 総司だったらもしかして俺のことを「ポチ」と呼んだりするかもしれない。そうしたら、やっぱり「わん」と返事してやらねばならないだろうな……）

森はとても鬱蒼としていた。

（何はともあれ）

と一は木々の下に入って行った。

(あんなに暑かったところから、こんなひんやりした・・・ひんやりした何だ?)

一は、言葉が出てこないのに驚いた。

(つまりひんやりした　この・・・この、これの下、なのだが)

一は、木の幹に触れてみた。

(これは、何という名前だった?)

一はしばらく考えた。それから急に不安になって声に出してみた。

「それでは、俺は一体誰なのだ？　思い出さなければ・・・」

だってそうしなければ、自分が元の世界に戻る理由もなくなってしまうのだから。

「さっき考えていたことは・・・」

名前のことを考えていたはずだと一は必死に思い出そうとした。

しかし「ポチ」という名前しか出て来なかった。

(まずい、このままでは俺の名前が本当に「ポチ」になってしまう。そうだ、さっきの・・・)

羅刹になれば、記憶が戻るということかもしれない。一はキノコを食べようとした。

(だが・・・これは何だった？本当にあいつはこれを食べると云ったのか？)

するとちよつと、テントウムシが飛んで来て一の腕に停まった。よく見るとそれは女の子で、同じ薄桜学園の雪村千鶴だった。しかし一には、もうその名前さえ思い出せなかった。

千鶴はづるづるとした上目遣いで一を優しく見つめた。

(か、かわいい・・・)

一は指で撫でようとした。でもそれはちよつと飛びのいて、またつばらな瞳でじつと一を見つめている。

「あなた、誰ですか？」

千鶴テントウムシは云った、とてもかわいらしい声で。

「それがわかればな。すまないが、お前は何という名前だ？もしかしたら、こちらもそれで思い出すかもしれない」

「もうちよつと先まで行ったら教えますね。ここでは思い出せないんです」

と千鶴は答えた。

そこで一人と一匹は、森の中を仲良く一緒に歩いて行った。やがて、また開けた野原に出た。すると千鶴はとつぜん空中に飛び上がった。

「私はチヅル！ あ、あなたはシンセングミの人間！一緒に居たことが知られると叱られちゃう！」

次の瞬間にはチヅルは全速力で飛んで行ってしまった。

一はそれを呆然と見送って立ちつくしていた。せつかく千鶴のことを思い出せたのに、こんなに急に去られてしまったのは総司とはぐれてしまった上に結構なショックだった。

（だが、キノコに頼らなくとももう自分の名前がわかる。それはちよっとは安心だな。斎藤一、斎藤一・・・もう二度と忘れん）

やがて、森の真ん中に標識が見えた。

11 不思議の国の虫たち（後書き）

千鶴ちゃんがテントウムシになったのに深い意味はなくて、
単に私の好きな虫というだけですw
だって本編だとブヨとかバター付きパン蝶みたいのしかないんだ
もん。。。。

12 チツルとカオル

(さて、あの標識のどちらに従うのがいいのだろうか?)

近寄って見ると、二つの標識は、両方とも同じ方向を指していた。一つには「チツルの家」、もう一つには付け足したように「カオルの家」と書いてある。

「つまり二人とも同じ家に住んでいるということだろう……。ともかく森から出る道が標識にない以上、立ち寄って道を訊くぐらいはできるはずだ。暗くなる前に8マス目につかなくてはならんかな」

しかしそう簡単にはいかなかった。進めど進めど道は2つに分かれて、その度に標識が2つあった。ただやはりいつも同じ方向を指していた。

そこで、一はわざと反対方向に行ってみた。すると突然、横に並んだ双子に出くわした。よく見るとそれは知った顔だった。双子だと思ったのは、2人がそっくりな上に同じ着物と袴だったからだ。

「雪村……それに南雲なぐせ……」

左側にいる片割れが口を利いた。

「おや、シンセングミの方ですか。残念ですが、ここから先は通すことはできません。どうしてもというなら、私たちどちらがチツルでどちらがカオルか、見分けてごらんなさい」

「何……」

一は少し考え込み、訊いた。

「先ほど名無しの森にいたテントウムシはどっちだ」

「・・・私です」

「私です」

ほぼ同時に答えが返ってきた。いや、右側の答えを左側が遮るように答えてきた。右側は少し怯えているように、大きな瞳を潤ませ、上目遣いでこちらを見ている。

「・・・わかった、お前がチヅルでお前がカオルだ」

右側と左側を順番に指さした。ちっ、と左側が舌打ちをした。

「くそつ。おいチヅル、何で森になんか1人で行ったんだ」

「サイトーさん！ 私も、一緒に連れて行ってください。鬼として生きるの、もう嫌なんです。お千ちゃんに会いたい」

右側のチヅルが駆け寄って手を伸ばした。一はその手を取った。

「わかった、共に8マス目まで行こう。この戦が終わったら、必ず千に会わせてやる」

「・・・そうはいかないよ」

歩こうとしたチヅルを、カオルが引き止めた。チヅルのもう片方

の手を掴んでいる。

「南雲！ その手を離せ」

「離して、カオル！」

「絶対に離さない。チヅルはここにオレとずっと一緒にいるんだ」

一とカオルはチヅルを間に睨み合ったまま、じりじりと弧を描くように動いた。

「どうしても離さないつもりか。それならば、俺にも考えがある」

一は胸元に入れていたキノコを取り出した。

「！ それは・・・」

「お前たちの、シンセンゲミ羅刹化計画はとうに失敗している。変若水はこのキノコで解毒できるのだ。だから俺は羅刹になるのは怖くない」

「やめる、ここで変若水の話は口にするな！ コープティさんに聞こえたら・・・」

「コープティ？」

すると突然、すぐ近くから、雷のような低い音が聞こえてきた。

「野獣か？」

一は誰とも無く呟いた。その途端、カオルは、

「云わん事じゃない、ジャバコードだ!!!」

悲鳴を上げて一目散に駆け出して消えてしまった。
残されたチツルに、一は尋ねた。

「何だ、ジャバコードというのは」

「伝説の怪物です、恐ろしい化物だとか」

「変若水となんの関係が？」

「変若水の元だといわれてるんです、それで父が研究して……」

そこで、再び轟音が響いた。

「たぶん、野獣じゃないと思います。行ってみましょう!」

一とチツルは音のする方向へ歩き始めた。

12 チツルとカオル（後書き）

デイーとダムはやっぱり双子なのでこの2人で。

千鶴が最初から鬼の方だったら、やっぱりちーさまと

薫 と天霧・不知火 があっただんでしょうかね・・・。

最初はヤンデレカオルが、チツルと自分を手錠でつなぐとか
考えてました（爆）

13 歌と水

「では一体何だ？」

一はチヅルに訊いた。

「アマギリさんです」

「アマギリ？」

果たして、音の原因は、眠っている天霧のイビキだった。

「こんな所に寝てるなんて、風邪ひいちゃうんじゃないかしら」

チヅルは心配そうに云った。

「では、起こそう。王手でもあるし」

天霧ならば、訳を話せば譲ってくれるのではないかと一は考えたのだ。

「それはダメです！」

チヅルの剣幕に一は気圧されてしまった。こんな風に声を荒げるところは学園でも見たことがない。現実とはやはりみな性格が多少違っているようだ……。

「夢を見てるんですよ、アマギリさん」

チヅルの答はさらに一を面食らわせるものだった。

「そ、それは、誰にもわからんだろう」

「いいえ、サイトーさん、あなたの夢です。もしアマギリさんが起きてしまったら、サイトーさんは消えちゃうんです！」

「まさか、そんなわけはない。もし俺が消えてしまつと云うなら、雪村、お前だつて消えてしまうのではないのか？」

つい大声になってしまい、チヅルに諭された。

「シート！ そんなに大声出したら、アマギリさんが目を覚ましちゃいますよ」

「夢を見ているとすれば、それは俺のはずだ。俺の夢の中で夢を見ているアマギリを、起こすの起こさないの言っても仕方ない。雪村、お前だつて本当は、俺の夢に出てくるものの一つでしかないのだから」

と一は云った。

「私、現実本物です！」

とチヅルはついに泣き出してしまった。

「わ、悪かった、泣いても、問題が解決するわけではない」

一は慌てて云った。

「もし私が本物じゃないなら」

チヅルは泣きながら半分笑っていた。

「泣くわけないじゃないですか」

「夢の中だつて泣くことはできる。それが本物かどうかという証拠にはならない」

一は云ってしまったてから、なおさらチヅルを追い詰めてしまったことに気づいた。

「そんなのデタラメです」

とチヅルは涙をぬぐって、なるべく元気な声で云った。

「とにかく、そろそろ森から出たほうがいいです。だつてすごく暗くなってきたでしょう？ 雨が降るのかも。私はここで、アマギリさんを起こさないように見張ってますから、サイトーさんは早く8マス目に行ってください」

チヅルはどこから出したのか、大きなこつもり傘を一に渡した。

「しかし・・・いいのか？ また南雲に見つかってしまつぞ」

「大丈夫です、アマギリさんが居たらカオルは何もできませんから」

「そうか・・・名残惜しいが」

「はい・・・サイトーさんも、お気をつけて」

遠ざかるチツルは、少し寂しそうな笑顔で手を振っていた。

やがて、チツルが歌っているのだろう、子守唄が聞こえてきた。

そしてその流れにー歌声はいつの間にか川になっていたーは
こつもり傘を浮かべて進む事にした。

(そういえば、ジャバコードと変若水の関係について、もう少し
委細を訊いておくべきだったな。雪村の父親が研究していると
か言っていたが・・・)

こつもり傘がついた岸からは、長い塀が見えた。そして、そこ
は何かつるつるしたものが光っているようだった。それは大きな卵
だった。

13 歌と水（後書き）

薄幸少女チヅル。こんな風にするつもりなかったのに、ごめんなさい！

そして天霧さんの扱い・・・orz

こんな感じですが感想等いただければ励みに頑張ります。
きつと・・・もう少しで終わる、ハズ！

14 コープティ・ドープティ

近づくほど、卵はどんどん人間らしくなってきた。あと数メートルのところまでくると、顔がついているのもわかるようになった。そして間近に来てみると、それがまさにマザーグースに出て来るハンプティ・ダンプティだというのがはっきりわかった。

(・・・しかし、この顔はどこかで会ったことがある・・・そうだ、雪村の父親、綱道ヒツミチさんだ)

そのハンプティ・ダンプティは高い塀の上に、座禅を組むように腰掛けていた。しかし塀はとても薄く、どうやってバランスをとっているのか謎だった。そして目はしっかりと明後日の方を見据え、こちらの方をまるで見ようともしなかった。

なので、一はうつかりと口に出してしまっていた。

「綱道さんに似せた、ハンプティ・ダンプティのぬいぐるみなんだろう。・・・それにしても本当にそっくりだな」

綱道は、しばらく何も言わなかった。そして、口を開いたときには、一の方を見もしなかった。

「卵呼ばわりされるとは、実に不愉快千万ですな！ 私はハンプティ・ダンプティではない」

(卵とは云ってないのだが・・・)

「失礼、そっくりに見えるかと申し上げたつもりだったので」

一はなるべく丁寧に弁解した。

「コープティ・ドープティという名前がちゃんとある！ 略してコー・ドードーだ」

コ？プティ、略してコー・ドードーは、またこちらを見ずに云った。

(しかも、名前まで似ている・・・！)

まるで向こうの木に向かって話しているようだったので、一もなんと答えていいのかわからなくなってしまった。

(これではまるつきり会話にならないな・・・)

そして、以前英語の授業で習ったマザーグースの歌を思い出してみた。それは自分を見失わないためでもあった。

「Humpty Dumpty sat on a wall.
Humpty Dumpty had a great fall.
All the king's horses and all
the king's men
couldn't put Humpty together
again」

(良かった、俺はまだ元の世界の人間だ・・・)

「君、一人で突っ立ってブツブツ何を言っているのだね。名前と用件を述べたまえ」

「俺の名前は齋藤サイトウハジメ一です。8マス目まで行きたいので、そこを通してもらえませんか？ もちろん、力に訴えることもできますが」

一は刀の柄に手をかけてみた。しかし、本心ではなるべく刀を使わず穏便に済ませたかった。

「ただでというわけにはいかんな。私と謎勝負をして、勝ったら通してやることにしよう」

「・・・わかりました」

一は少しほっとした。

「では、君から出したまえ」

「は・・・ええと、では、なぜたった一人でこんなところに座ってらっしゃるのですか？ その塀はとても狭いし、地面に降りた方が安全なのでは？」

「・・・なんともまあ、えらく他愛のないなぞなぞですな！」

コ？プティは鼻を鳴らした。

「その程度のものに答えられんとも？ この私も舐められたものだな！ 勿論、ここには他に誰もいないからに決まっている。それにもし私が仮に本当に落ちたとしても もちろんそんなことはまったくあり得んことだが でも、仮にもし落ちたとして どうなるか、君にはわかるかね？」

コ？プティは鹿爪らしく勿体ぶった様子を見せたので、マザーグ

答

「入を知っている」としては笑いをこらえるのが精一杯だった。

「……王さまが馬と家来をすべて送る、というのでしょうか」

するとコープティは真つ赤になって憤慨した。卵が紅くなっている。それはそれは見物みものだった。

「なんていうひどい話だ！ 盗み聞きしていたのか！」

「そんなことはしていません。英語の教科書に書いてあります」

「はとても静かに答えた。」

「もういい！ 行くがよい」

唐突すぎて、一は少し面食らっていた。しかしせっかく相手が譲ってくれているのだから、と頭を下げた。

「では失礼します、お元気で！」

コープティは目を閉じて、もう何も言わなかった。

一はもうしばらく待って、また口を開くかどうか見た。しかし一をもう既に見ないように扱っているようだったので、もう一度だけ

「さようなら！」

と試みてみた。そしてこれにも返事がなかった。静かにそこを扉を登って向こう側に降りた。

歩いていくと、突然背後で「グシャツ」という凄まじい音がした。振り返るとコープティの姿は消えていた。

そして次の瞬間には、シンセングミの兵士たちが方々から走ってきた。あの屯所内にこんな人居ただろうかと疑ってしまうほどの大群になって。一は巻き込まれては大変と、木の陰に隠れて兵士たちが通り過ぎるのを待った。

しかしこの兵士たちの頼りないこと。しょっちゅう何かにつまずいたり、おたがいにぶつかつたり、そして一人が倒れると、いつもそれにまた何人がつかまずいて倒れるので、やがて地面は人の山だらけになってしまった。

(・・・文字通り将棋倒しだ)

それから馬がやってきた。だが、馬たちですらしょっちゅうつまづいている。そして、馬がつかまずくと騎手は転げ落ちる、というのがおきまりのようだった。混乱はますますひどくなって、一は森から抜け出し、やっと一息つくことができた。

(・・・あれではしばらく救出作業はできんだろうな)

ふと見ると、そこではコンドー王が地面に座って、帳面に何やら書き込んでいるのだった。

14 コープティ・ドープティ（後書き）

この配役は、以前youtubeで、
薄桜鬼キャラを全部綱道さんの顔にしたらというのを見て思いつき
ました。

カオルが呼んでいた通り、コードーの表記にしたかったんですが、
コンドー王が直後に出版だったので紛らわしさを避けるためにコー
プティでw

漢字だったらよかったですけどね・・・。

15 シラヌイとサノ

(王様とは近藤さんのことだったのか・・・)

コンドー王は、一に向かつて顔を上げ嬉しそうに叫んだ。

「どうだ、約束通り総がかりで送ってやったぞ！サイトーくん、森を通ってくるときに、隊士たちを見ただろう？」

「ええ、見ました。何千人といました」

「四千二百、とんで？。それが正確な数だ。幹部隊士と歩兵全部は送れなかった。戦に必要なだからな」

とコンドー王は帳面を見ながら云った。

(割れた卵を助けるより、戦に人員を割いた方がいいのでは・・・)

一はそう思ったが、今さらだと考え黙っていた。

「そろそろ伝令が戻ってくるはずだ。君が立っているところから見えないかどうか、教えてはくれんか」

コンドーは腕を伸ばして、傍にあった望遠鏡を一に渡した。覗くと、遠くに近づく影が見えた。

「ええ、誰か見えます。しかし、こっちに向かつてはいるがすごくゆっくり。しかも、随分とおかしな行動をしています。あれはウサギですか？」

というのもその伝令は、こっちに向かいながらもつぎぎ跳びでぴよんぴよん跳び上がったりしているのだった。

「シンパチは飛ひの騎士だからな。しょうがない、シンパチが来るまでゲームでもしよう。どうだサイトーくん、シンパチの名前であいっえお作文を作ってみないか？」

「え……は、はあ」

本来なら戦の最中に間違いないのだが、無邪気なところが学園の近藤理事長にも似ているな、と一は思った。

「では、『し』からな。し……『し』っかり者で『し』」

「ん……んん、す、すみません、思いつきません」

「はっはっは、確かにそうだな。では、ぱ……『ぱ』と華やか『ぱ』」

「ち……茶髪の」

「チャパツとは何だ？ 蘭語かね？」

「……では『ちりちり頭』で」

「うん。じゃあ、な……『何でもできる』」

（そういえば、永倉先生もあれで実は理数系だし本好きだったな……）

「が……『頑健で』」

「く……『屈強な』」

「王様、それでは同じような意味では？」

「ははは、シンパチの印象だとどうしてもそうなってしまっただ」

「そうですね。では、ら……」

「オチだから、何か面白いものにしてくれたまえ」

「ええ？（ムチャ振りだな……）では……『ラクダの股引愛用家』」

この瞬間に伝令のシンパチが到着した。息を切らして一言も口がきけず、手をばたばたと振り回していた。

「おおシンパチ、ご苦労さん。今サイトーくんと君のあいっえお作文を作っていたんだ」

「あ、あいっえお作文？ なんだってこんな時に……。サンナーさんのところが苦戦中なんだ、行ってやってくれ！」

シンパチは息を整えながら呆れていた。

「うむ、わかった。それでは、サイトーくん、森の中は敵だらけだが、健闘を祈る！」

そういうと、コンドーはシンパチと一緒に動く歩道の上を跳ぶよ

うに行ってしまった。

(シンパチの馬はどうしたんだろう・・・)

考えたが答が出そうにないので、一は次のマスに進むことにした。すると、

「王手！」

という声が、馬の蹄の音とともに聞こえた。その直後、甲冑に身を包んだ騎士が、青銀色の髪をライオンのたてがみのようになびかせ、目の前に停まったのだった。

「よう、これでお前はオレの捕虜な。煮るのも焼くのもオレの自由だ」

「な・・・(不知火しらぬゑ・・・鬼の側の騎士ということだな)」

「観念しな」

騎士はピストルを構えて一に狙いを定めた。

(飛び道具だと・・・?! どう考えても勝ち目がない・・・!)

冷や汗が背筋を流れた。その直後、

「王手！」という別の声がした。

そして一の隣に馬をつけたのは声の主、サノだった。騎士2人は、

無言でしばらく睨みあっている。一はその顔を交互に見て成り行きを見守った。

「おいおい、こいつはオレの獲物だぜ！」

たてがみの騎士、不知火が口を開いた。

「でもそこへ俺がやってきて、こいつを助けに来たわけだ」

とサノが答えた。

「ふん、それならこいつをめぐって決闘だな」

不知火は鞍の横にぶら下がっていた兜を手に取り、それをかぶった。

「決闘の規則はもちろん守るんだろうな？」

サノもシルクハットをかぶりなおした。

「あたりまえさ」

と不知火。そして二人はお互いに馬で距離を取り、一騎打ちを始めた。一は流れ弾に当たらないように少し離れて状況を整理しようとした。

（ユニコーンとライオンは、確か王冠をめぐって決闘するのでは・・・）

そこに、また第3の声があった。

「おやつ休憩、10分間！」

15 シラヌイとサノ（後書き）

原作をなぞってしまっているの謎の展開ですね（汗

原作ではhを使って表現（ハヒフへホの恋人）というものだったのですが、

シンパチをどうしていいかわからないのであいうえお作文にしてみました・・・。

左之さんの好敵手である不知火さんは天パなので、

きつと髪を下ろせばライオンのようになるんじゃないかと・・・！

16 彼ならではの発明

現れたのはコンドー王とサンナンだった。いつの間にか増えていた観客に、シンパチがお菓子の乗ったお盆を運んで回っている。

「今日はこれでもう決闘しないと思うんだがな。太鼓を始めるように命令を伝えてくれ」

とコンドーはシンパチに云った。

「了解だ」

シンパチは、またもやウサギ跳びでぴょんぴょん弾みながら行ってしまった。

サノとシラヌイの2人は、馬から落ちて取っ組み合いになっていたが、コンドーたちの姿を認めると立ちあがって握手した。サノが、ぜいぜい言いながら一同のところへ近づいてきた。

「おいハジメ、見てたか？ 輝かしい勝利だっただろ」

「・・・わからん」

と一は疑わしそくに云った。そもそも決闘のルールも決着もどうだったのかわからないのだ。

「俺は、誰の捕虜にもなりたくない。8マス目に行かなくてはならないのだ」

「わかってるよ。これが終わったら、無事8マス目まで送り届けて

やる。お前が女王になるんだっいたら、俺も王様になるまであとちよつとだな。今回はかなり上手うわてだったろ？ みんな」

と、コンドー王の頭上の王冠をちらつと見た。

「ま・・・まあまあってとこだな」

コンドーは、王冠に手をやりながらかなり焦って答えた。

「サノ、その角で突き通すのはあまりよろしくないぞ」

「向こうだって怪我はしてないさ」

サノはどつでもよさげに云った。

「おいおい、勝手なことを云ってくれるじゃねえか」

とそこにシラヌイがぬつと顔を出した。

「勝負は決まっちゃいねえ。まだこれからだ」

サノは、一からサンナーンの方に向き直った。

「おい、サンナーンさん、二葉屋ふたばやの豆大福を出してくれよ。あんたの持って来た饅頭だと、何が入ってるかわかりやしねえ」

「おやおや わかりましたよ。もう変若水の研究は止めたというのに・・・」

とサンナーンはつぶやいて、持っていた袋から大きな豆大福を取

り出した。

「サイトーくん、ちょっと持っててくれませんか」

とそれを一に渡し、今度は大きな皿と包丁を取り出した。

(まるでド　えもんの四次元ポケットじゃないか・・・)

一は顔色一つ買えなかったが、内心では度肝を抜かれていた。しかし一同はそれを平然と見ている。

「じゃあお前、大福を切り分けてくれよ」

とシラヌイは、地面に座り込んだ。「食い物ではフェアプレーな！」

一は地面に座って膝の上に乗せた皿の大福を、包丁で切るうとした。

「どうした？　人斬りにかけちゃ一級のシンセングミが、大福切るのにいつまでかかっているんだ」

「いやしかし、」一はシラヌイに答えた。「切っても切っても、その端からまたくっついてしまうのだ！」

サンナーンが云った。

「こちらでの大福の扱いを知らないんですか。まずみんなに配って、その後で切るんですよ」

一瞬呆気に取られてしまったが、一は云う通りに立ちあがって皿を全員に回すと、大福はひとりでに切れてくれた。

「それから切りな」

と、空っぽのお皿を持って自分の場所に戻った一に、シラヌイが云った。

（無い大福を、どうやって切れと云うのだ・・・）

「おいおい、こんな不公平じゃねえか！」

一が途方にくれているところへ、サノが云った。

「なんでシラヌイの方が俺の倍もあるんだよ！」

「俺の方が好きなんじゃねえの？」

代わりにシラヌイが答える。「それは無い」と云ったのだが、サノとシラヌイには聞こえていないようだ・・・。

「けど、自分にはぜんぜん残さなかったぜ。おいサイトー、豆大福は好きか？」

「まあまあハラダくん、私の分もありますから、頑張ってください」

サンナーンが自分の分の豆大福をサノに渡した。

「おう、すまねえなサンナーンさん。さあて、これでやっと、本気で勝負できようってもんだな！」

「豆大福を頬張ったサノが、意味ありげに一を見ながら云った。一は悪寒がした。」

「おれがあっさり勝つだろよ」とシラヌイ。

「ほう、そいつあどうか」とサノ。

「なんだと、ボコボコにしてやる、この根性なしめが！」

と食べ終わったシラヌイは怒ったように答えつつ、立ち上がりかけた。ところが、

「ん・・・なんだ、急に眠気が・・・」

「お、俺も・・・勝負は一時お預けだ・・・」

シラヌイだけではなく、サノ、そしてコンドーや観客までが眠ってしまった。

「お、おい、みんな、どうしたんだ!」

「長引きそうだったので、眠ってもらいました」

「! サンナーンさん・・・もしかして、さっきの豆大福・・・」

16 彼ならではの発明（後書き）

もしタイトルを原作に則らずにつけるとしたら、

「サノの野望とサンナインの思惑」ってところでしょうか。

あの袋もきつと作ったのだろうと。

しかし、饅頭（手製？）に警戒しながら、既製品だからってその相手の皿からもらって・・・私の書くキャラはどこか抜けているようです（汗）

ローカルネタですが、出町のふたばが新選組の頃からやっていたかどうかは

私にはわかりません・・・w

17 ハジメ女王？

「何故だ・・・？ 説明を求めたい」

―は呆気に取られて尋ねた。

「サイトーくんに、8マス目まで行ってもらいたいからですよ。元の世界に戻る方法は、それしかない」

「？」

「これでお会いできるのは最後かもしれない、だから見送る役目は私がしたかったんですよ」

「サンナンさん、あんただって俺と同じ世界から来てたんじゃないのですか？ だとしたら、あんただって戻れるはず・・・」

「そうはいかないんです。私はこの国の大臣であり、シンセングミの騎士でもある。ジャバコードが甦るまで、ここに居なくてはならないんです」

「ジャバコード？ だってあれは伝説の怪物なのでは・・・」

「いいえ、コープティが密かに研究していたのです。鬼たちの秘密兵器としてね。だからその前に、私たちは鬼を倒しに行かなくては」

「いやしかし・・・。話がずれている、俺が知りたかったのは、元々あんたがどうして俺と同じ世界にいたのかです」

「それはいずれわかることです。まず私たちはジャバコードをなんとかしなくては……。ほら、あそこが8マス目へ続く道ですよ」

サンナーンが指差した方に、森の出口が見えた。

「あれを越えたら、カザマがいるはずですよ」

「……本当に、これでお別れなのですか？」

「運が良ければ、また会えるかもしれません。気をつけて、お元気で」

「そうか……。あいわかった。サンナーンさん……。山南先生も、お元気で」

一はサンナーンを残して、森をあとにした。

森を抜けると、小川があった。飛び越えて、一は何かに躓いて転んだ。見てみると、それは王冠だった。

「……ついに来たのか、8マス目に……」

「ふん、まさかこれで終わりだと思っているんじゃないだろうな。シンセングミの犬よ」

起き上がると目の前には、豪華な玉座の上で黒のレザースーツに身を包み鞭を手にしたカザマがいた。

(じよ、女王の意味が違っている……)

「女王になるためには試練が必要なのだぞ」

「・・・お前が、カザマだな？」

「如何にも。敬え、称えろ、跪くがいい」

「な・・・とにかく覚悟しろ！」

「お前は・・・一体何者だ？　まず名乗れ」

「俺は、俺は・・・シンセングミの斎藤一だ！」

「本当にそうか？　シンセングミのサイトーは、記憶喪失だと噂に聞いているが？」

「な、何故それを・・・」

「ふん、我が軍にはシンセングミに遣わした間者がいる。お前も知っているだろう」

よく見ると、カザマの周りを小さな蛾が一匹飛んでいる。

「伊東・・・」

一は唇を噛み締めた。

「もう一度訊く。お前は一体誰だ？　シンセングミのサイトーか？　それとも・・・別の人間なのか？」

自分が今、誰なのか。自分だってそれを知りたかった。

このおかしな国にいたサイトーがどうなってしまったのか、いやもしかしたら自分だと思っ込んでいるものは、サイトーがおかしくなって記憶喪失の代わりに作り出した幻覚なのではないか？
しかし今はそんなことを迷っている暇はない。

「そんな事は・・・俺が知りたいぐらいだ!!」

答えるのとほぼ同時に、一は刀を抜こうとした。しかし、いくら抜こうとしても刀が抜けない。剣道のように、最初から構えているわけではないのだ。

「ふん、吠えるだけは一人前だが、鯉口こいくちを切らずにいきなり抜こうなどと、とんだ素人だな。やめておけ、怪我をするだけだ」

「何だと・・・?!」

「まあよい。お前、近くで見るとなかなか綺麗な顔をしているな。剣の使い方も知らぬお前を刺客にするようなシンセンゲミなど辞めて、俺に仕えぬか？ 小性にしてやってもよいぞ」

「な・・・」

「俺を落とせるものなら落としてみせろ、ヒジカタにもそう言われたのであるう?」

(落とすとは、そういう意味だったのか・・・?!)

一が呆然とした時、

「ハジメくん、伏せて!!」

よく知った声が、背後から響いた。振り向くと、脇からソージが地面を蹴りカザマに斬り掛かっていた。

17 ハジメ女王？（後書き）

ちーさまの台詞はCD「竹取鬼語」から拝借w

そこでやはり女王様なら・・・とおかしな格好をさせてしまいました（爆）

ちなみに、ここで、参考に行っている原作の各章タイトル（from Wiki）です。

第1章 / 鏡の向こうの家 “ Looking-glass house”

第2章 / 生きた花の庭 “ The Garden of Live Flowers”

第3章 / 鏡の国の虫たち “ Looking-glass Insects”

第4章 / トウィードルダムとトウィードルデー “ Tweedledum and Tweedledee”

第5章 / 羊毛と水 “ Wool and Water”

第6章 / ハンプティ・ダンプティ “ Humpty Dumpty”

第7章 / ライオンとユニコーン “ The Lion and The Unicorn”

第8章 / ぼくの発明 “ It's my own Invention”

第9章 / 女王様アリス “ Queen Alice”

第10章 / ゆすぶると “ Shaking”

第11章 / 目が覚めて見ると “ Waking”

第12章 / 夢を見たのはどっち “ Which Dreamed It?”

18 揺れている

カザマはすぐに腰の太刀を引き抜いて、それを受け止めた。金属音が響き渡る。ここは時代劇の世界ではない。本当に刀を抜いて斬り合っているのだ。

「とんだ邪魔者が入ったな。お楽しみを邪魔した罪は重いぞ」

「君こそね、僕のハジメ君に何いやらしいことしようとしているの？ そんなやつはとっとと殺しちゃうに決まってるでしょ？」

拮抗した刃を間に、殺意を込めた笑みを交わす2人。

一は自分も加勢しようとして刀を抜こうとすると、カチャ、という音がして束と刀身の間の部分が現れた。

(鯉口とは、刀の安全装置か・・・)

鯉口の切られた刀は今度は意外にも容易に抜けた。腰に下げた時を感じていたが、竹刀とは違う重さ、そして、冴え渡った光に心を奪われた。

(これが、真剣・・・)

「ハジメくん、何やってんの？ 加勢なんて考えなくていいからね
「！」

カザマと鏢迫り合いを繰り広げるソーヂが叫ぶ。

「しかし・・・」

「剣の使い方まで忘れてる子に、する事は何もありません」

そこにヒジカタが現れた。額に青筋を立てた怒りの形相だ。

「おいソージ、てめえコープティに何をした！」

「コープティ？」

その時、揺れるような地響きがした。甲高い鳥のような、それできて低く唸るような鳴き声とともにそれが近づいてくる。ただならぬものを感じたのか、ソージとカザマは互いに剣を退いた。

「僕じゃないですよ。ただ、サンナーンさんが、石田散薬の改良したものを試してみたいと云うから」

「サンナーンさんは、何に使うか教えてもらえずに強請ねだられたって云ってんだよ！ 何にしる、実行犯はお前じゃねえか。おい、この落とし前をどうつけるんだ」

ヒジカタとソージが諍いさかいをしていると、森から逃げ出して来るセンチングミの隊士たちに続いて、遂にその謎の音の正体が姿を現した。体育館ほどある巨大なドラゴンの身体に、綱道の顔が乗っている。いや、綱道の顔をしたドラゴン、と言った方がいいだろうか。

「な、何だあのバケモノは！」

さしものカザマもすっかり怯んでいる。

「綱道さん、いや、コープティ・ドープティなのか・・・？」

訝る一の呟きにヒジカタが答えた。

「違う、あれが伝説の怪物、ジャバコードーだ。こいつがサンナーンさんにもらった新石田散薬を、コープティ・ドープティにふりかけちまった」

「正確には、それだけだと特に効き目もなかったんで、これもかけてみました」

ヒジカタに顎を向けられたソージは、懐から紅い液体の小瓶を取り出した。

「!」

ソージを除いた一同がその場で硬直した。

「変若水・・・な、何故そんな物を使った!」

「いや、だってコープティさんって確か鬼だったし、別に羅刹になってもおんなじことかなと思って」

一の詰問に、ソージはぬけぬけと答える。その間にも、コープティ、いやジャバコードーは鋭い雄叫びを放ちこちらに向かって地鳴りごと進んで来る。

「とにかく、カザマ、勝負はひとまずお預けだ」

「そつだな」

ヒジカタとカザマは仲良く走り出した。

「あっ、ヒジカタさん、待ってください!」

一の呼び声にヒジカタは振り向きながら、

「サイトー、女王試験は変更だ、ジャバコーダーを倒せば女王にしてやる!」

「な・・・?!」

あっという間にヒジカタたちの姿は小さくなってしまった。揺さぶられながら呆然としていた一は己を取り戻し、意を決して抜いたままの刀を構えた。しかし、

「ハジメくん、何考えてるの?! ひとまずここは一旦退いて、策を考えないと!」

とソージに腕を引つ張られてしまった。

「しかし、俺は女王にならなければいけないんだ!」

「そんなこと言ったって、このままで勝てると思ってるの?!」

刀を納めた一とソージは走り出した。

18 揺れている(後書き)

さすが狂言回し、

やっぱり総司さんがでくると話に勢いがつくなーと思いましたw

w
w

真夏の夜の夢も今度総司をパツクでやってみるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1324y/>

不思議の国のはじめ君（SSLアリスパロ）

2011年11月22日22時52分発行